

# 阿嘉島の貝

波部忠重

日本貝類学会会長

Shells in Akajima Island

T. Habe

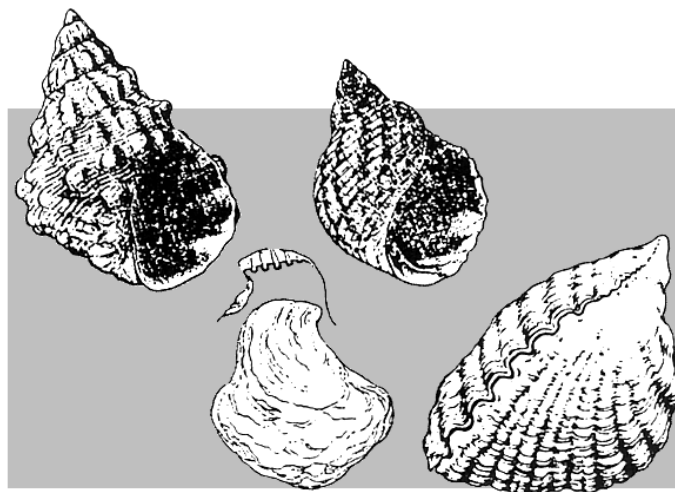
阿嘉島は慶良間列島にあり、沖縄本島那覇の西方30km 沖にある小さい島である。慶良間列島中では西寄りに位置する。ここに熱帯海洋生態研究振興財団の阿嘉島臨海研究所があり、この「みどりいし」はこの報告書であるから、ここを訪れる研究者の参考にこの島の周辺の貝類相を主体にその概要を紹介する。筆者は1989~90年に3回この研究所の援助で貝類を海岸で採集したが、90年11月には小型のドレッジで浅海の砂底を調べた。これとは別に、東京水産大学の大学院生土屋光太郎君がやはり数回この島を訪れて貝類を採集された。それらを合わせて現在までの成果で目録を作成した。その内訳は、多板類(ヒザラガイ類)11種、腹足類(巻貝類)372種、掘足類(角貝類)3種、二枚貝類83種、頭足類(イカ類)2種、合計471種であるが、まだ種名不詳の種が20種以上あるので、調査が進めば500種はすぐ越えるであろう。さらに数回調査してこの目録を発表したいと思っている。

## 貝類の概要

慶良間列島は今更述べるまでもなく、黒潮暖流域の中にあり、阿嘉島はその中でも西寄りにあるのでその影響を強く受ける位置にある。従って貝類相は

黒潮暖流系の種でほとんど構成され、熱帯太平洋諸島からフィリピン、台湾、沖縄、九州、四国、本州(房総半島)と黒潮に乗って種類を減じつつ北上分布する。沖縄は日本では南方であるから、黒潮系の貝類が最も多い所で、精査すれば太平洋諸島に産する種の大部分は沖縄にも分布しているといってもいいほどである。もちろん阿嘉島もそうである。そして少数種が日本から東シナ海にかけての固有種である。例えば、マルアラレタマキビガイはその一例である。

黒潮暖流系の貝の代表はタカラガイ科とイモガイ科で、阿嘉島では現在両科とも30種知られている。タカラガイ科はサンゴ礁に多く、キイロタカラガイ、ハナビラタカラガイは最も普通であるが、大型のムラクモダカラガイ、ハラダカラガイ、ホシダカラガイ、またジャノメダカラガイ、ヤクシマダカラガイ等が得られた。イモガイ科では、マダライモガイ、コマダライモガイ等が普通であるが、重厚なオンボククロザメガイ、クロザメガイモドキ、さらに、採取する時歯舌で刺されると人も死亡するという猛毒のアンボイナガイ等も時に採取される。この他、巻貝では、ミミガイ、サラサバテイラ、食用に採取されるチョウセンサザエ、スイジガイ、トウカムリガイ、テングガイ、チョウセンフデガイ等が大型の種



上右 タイワントマキビガイ  
上左 イボタマキビガイ  
下右 マクガイ  
下左 オハグログキ  
(潮間帯岩礁の貝)

である。二枚貝では、チサラガイ、カゴガイ、オオヌメガイ等が後述するシャコガイ類とともに大型種である。

当研究所の下池研究員はヤコウガイの種苗生産の研究をされ、すでに3年貝が水槽を這っている。

### 潮間帯の貝

潮の満干で海中に入ったり、露出したりする場所が潮間帯では原則として1日2回の周期を繰り返す。海中にあるときはまだしも、空中に露出すると夏は強い日射で高温と乾燥に耐えねばならない。冬は低温に曝される。また台風などで激しい波浪に曝される非常にきびしい環境下にある。特に高潮帯は厳しい。

干潮時に岩礁海岸へ行くと、最も高い所から下の方へわずか数 m の差であるが、種類が全く変わっているのが一目瞭然であるのだが、沖縄は一般的に個体数が少ない。阿嘉島でも同様である。最も高い所、潮上帯や高潮帯にはタマキビガイ類がいる。イボタマキビガイ、その下にマルアラレタマキビガイがみられ、コウダカタマキビガイ、ホソスジウズラタマキビガイが混在してくる。またゴマフニナも所々に

出てくる。潮間帯の下方では笠形貝が多くなってくる。ヨメガカサガイ、リュウキュウノアシガイ、コウダカカラマツガイ、コビトカラマツガイが現れるが、後の2種は一定の棲所 (scar) を持ち、干潮になるとそこから這い出して摂餌し、またもとの棲所に戻り、満潮時はじっとそこに付着する、いわゆる帰家習性を持つ種である。ヨメガカサガイは一定の棲所を持たないが、リュウキュウノアシガイはカラマツガイ類同様、一定の棲所を持っている。しかし阿嘉島の固体についてはまだ観察していない。また低潮帯の磯底に近いところにはアマオブネガイ科の種類が多く、キバアマガイ、コシタカアマガイ、アマオブネガイ、ニシキアマオブネガイ、リュウキュウアマガイ等が見られ、それに混じってオキナワイシダタミガイやハナダタミガイ、さらにカンギクガイがいる。

二枚貝類は意外に少なく、オハグログキやヘリトリアオリガイが岩の隙間に時々見られる位であった。その外マクガイ、アオリガイも採れた。

さらに低潮帯の緑藻の生えた岩場では岩の隙間にマダライモガイがいるが、これは非常に小型で成員になっている。この外、ノシガイも多い。数は多く

ないがコオニコブシガイやテツレイシガイ、シマベッコウバイ、レイシガイダマシ等もいる。

礁原の造礁サンゴ塊の下は大小さまざまな巻貝の棲む所でタカラガイ類やイモガイ類の成貝が得られるが、大型の種類は一般に個体数が少ない。

砂浜はその砂中に棲んでいる貝が意外に少ない。沖縄・奄美の代表的な砂浜の二枚貝イソハマグリも成貝は数個得たにすぎず、ナミノコマスオガイも死殻を拾った位で、リュウキュウナミノコガイはまだ採集されていない。イソハマグリは多いところでは沿岸住民の食用にされていて、白い殻や桃色がかった水管の肉が美しく、シジミやアサリ汁の代わりに十分に思うが、この島では残念ながらそれが出来ない。

またこの島では川が直接海に流入しないので、川口域にマングローブ林がなく、そこを棲所とするヒルギシジミ類のヤエヤマヒルギシジミ、リュウキュウヒルギシジミはみられない。

### サンゴ礁の貝

阿嘉島の周縁はサンゴ礁がよく発達し、造礁サンゴの種類も多く、海中景観が美しいので多くのダイバーが訪れている。

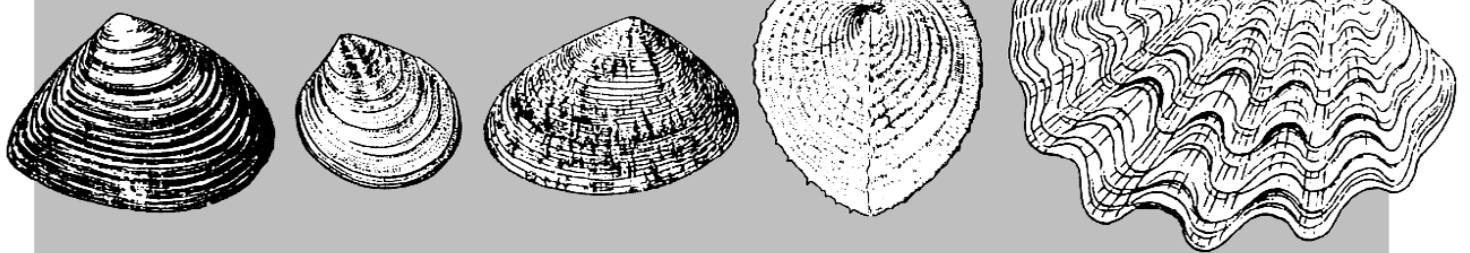
造礁サンゴは貝類の絶好の棲み場所となって、そ

の種類が多く、サンゴ礁でなければ棲息しない種類まである。その代表は二枚貝シャコガイ科である。

シャコガイ類は殻長1mを越える世界最大のオオシャコガイを含めて8種からなっているが、オオシャコガイが乱獲されるので、全種ワシントン条約の規制を受け、取引が禁止されている。シャコガイ類はサンゴ礁のうえやサンゴ礁に穿孔してそのくぼみの中に棲む。沖縄には4種が分布し、阿嘉島にはもちろん4種がみられる。すなわち、ヒレシャコガイ、シラナミガイ、ヒメシャコガイ、シャゴウガイである。シャコガイ類の外套膜には褐虫藻 *Zooxanthella* (渦鞭毛虫類の共生型) が共生していることはよく知られているところで、シャコガイ類は酸素や栄養物を褐虫藻から受け取り、二酸化炭素や栄養物(老廃物)を褐虫藻に与えている。二枚貝のリュウキュウアオイガイはサンゴ礁上の砂底に棲み、殻は前後が偏圧されてハート型になっている。この種もシャコガイ類同様、外套膜に褐虫藻が共生している。

巻貝サンゴヤドリガイ科の種類はその名のように造礁サンゴ、特にエダサンゴ *Acropora* の上に付着寄生している。そのため普通の巻貝のように口に歯舌を持っていない。阿嘉島ではクチュムラサキサンゴヤドリガイ、カプトサンゴヤドリガイ、カゴメサンゴヤドリガイの3種がみられた。さらにサンゴに穿孔

左からイソハマグリ、ナミノコマスオガイ、リュウキュウナミノコガイ  
リュウキュウアオイガイ、ヒメシャコガイ



して棲むムロガイも死サンゴを割っていると出てくる。

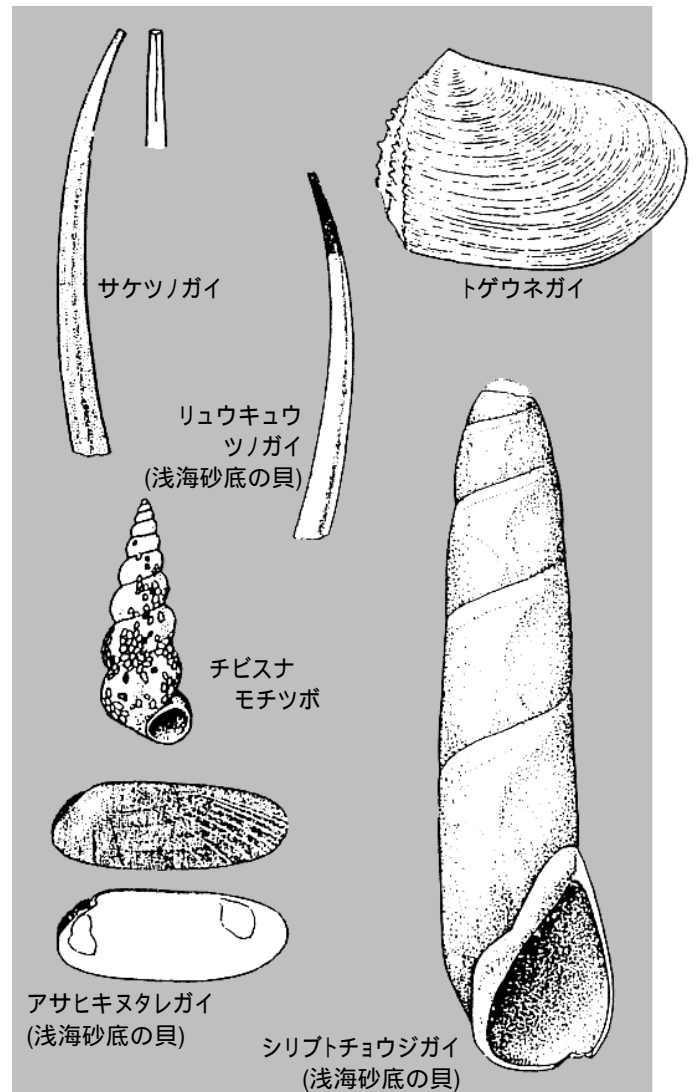
オニヒトデの大繁殖で造礁サンゴが食害されたが、阿嘉島もその被害を受けた。最近はおニヒトデが減少して被害は収まってきた。ホラガイはヒトデ類を捕食する習性があるが、数の多いオニヒトデを捕食するのであって、選別してオニヒトデのみを捕食するわけではない。

ところで、最近、サンゴ礁を食害する巻貝が問題になってきた。その種類はレイシガイ科のシロレイシガイダマシ属に属する類で、阿嘉島ではクチベニレイシガイダマシ、ヒメシロレイシガイダマシ、シロレイシガイダマシの3種が採集されたが、食害状況については観察していない。この貝類は生活に適応した細長い独特の歯舌を持っている。

タカラガイ類もサンゴ礁に多い貝類である。礁原のハナヤサイサンゴやエダサンゴの根元や下側に群がっている。キイロタカラガイ（メンガタタカラガイ）、ハナビラタカラガイが特に多く、ハナマルユキダカラガイが次いで多い。中国古代の貝貨は沖縄からもたらされたといわれている。

### 浅海砂底の貝

砂浜で貝を拾うのは死殻で、しかも磨かれて殻表の彫刻や色が痛んでいるので、良質の貝のコレクションは出来ない。それで阿嘉島の港外の水深10~20mの細砂底でドレッジを試みた。ドレッジといっても最も簡単なもので、保坂理事長が器用にヒューム管を切ってその後方に網を付け、前方に引き網を付けたもので、一晩の中に作ってくださった。研究所に



は新野式ドレッジがあったが、これは重くてしかも貝が採れないとのことであった。新野式は本来海の岩石を掻き採る目的であるから、使用目的が違うので当然のことである。保坂式でドレッジすると意外に多くの貝が採れた。網の中の細砂からリュウキュウツノガイの成貝の殻が栗のいごのように網を貫いて出ているほどである。

砂を篩にに入れて洗うと更に沢山の成貝が出てきた。二枚貝ではコタマキガイ、コマツヤマワスレガイ、ナミノコサラガイ、トゲウネガイ、巻貝ではホソムギヨフバイ、ハナゴショグルマガイ、コノボリガイ等が多い。

まだ数回ドレッジしたにすぎないが、なかなかの

珍種、沖縄新記録種そして新種と思えるものまである。それを少し拾いだしてみると：

シリプトチョウジガイ。この種はフィジーやサモア、クエゼリンなど熱帯太平洋で知られている、殻長1cm 足らずの細長い円筒形の貝である。1960年の沖縄目録にこの学名が載っていて注目されるのであるが、和名は形とはおよそ異なるシリプトチョウジガイになっているので、標本がないので確かめようはないが果たして正確にこの種であったか首をかしげている。だから正確には今回の記録が最初となる。殻長5.1mm 殻径1.7mm である。

チビスナモチツボ。この種は本州（房総半島）～九州では特に珍しいという貝ではないが、沖縄からは新記録である。殻長は僅かに3.5mm 位で白色殻表に砂粒をつけているのが変わっている。2個体採集した。

アサヒキヌタレガイ。この種は本州（房総半島）～九州の浅海の砂底で採集される細長いマテガイ形で、殻長は2cm 位、殻皮が殻縁よりも広くなり、両殻を合わせて海水を強く噴射して時々泳ぐ習性がある。体制は二枚貝類中最も原始的である。1殻片が採集され、殻長5.5mm の幼貝であったが、沖縄にも分布することが明らかとなった。

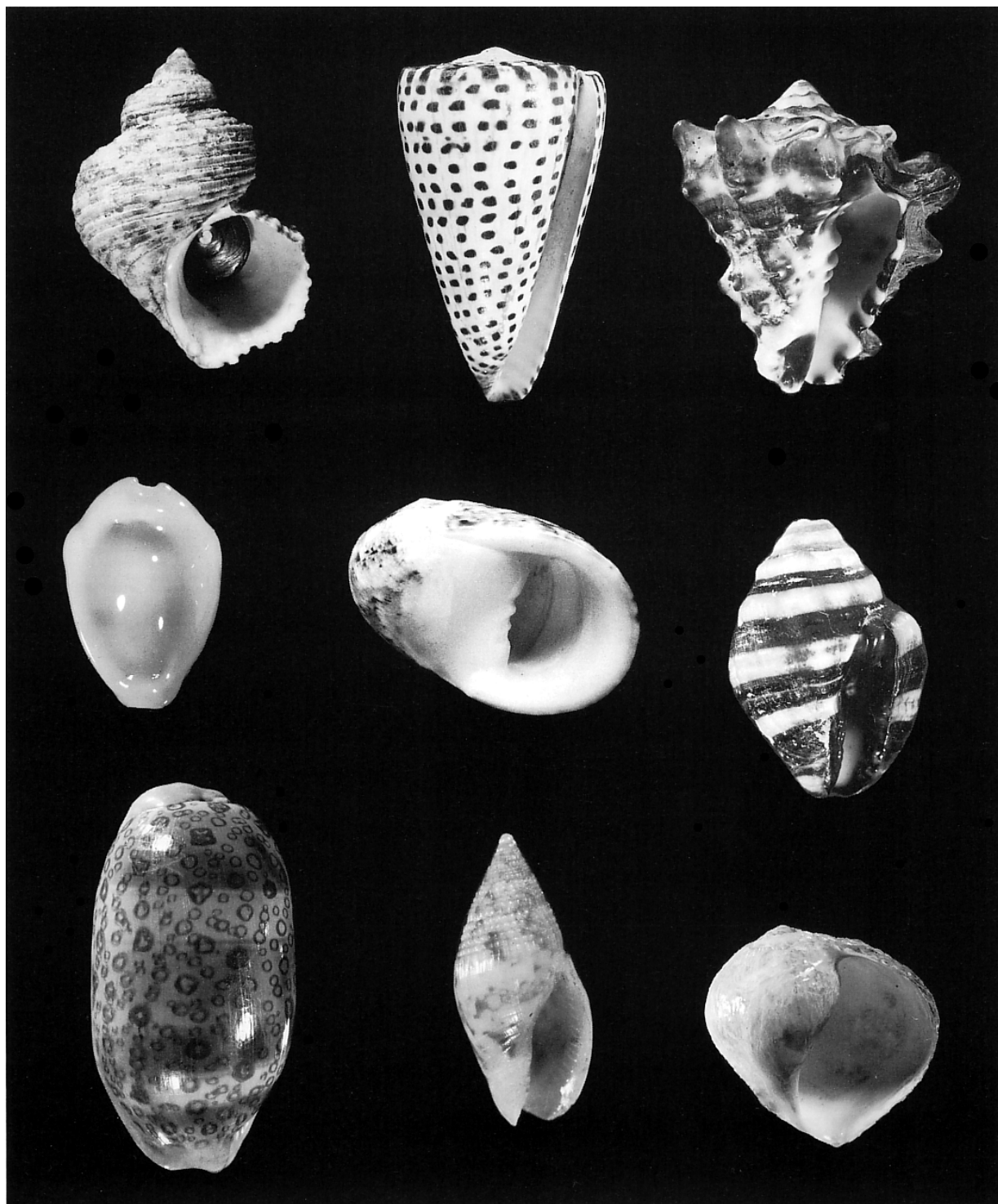
### 陸貝と淡水貝

貝は海ばかりでなく、陸や淡水にも棲んでいる。カタツムリ（蝸牛）やニナ（蝻）がそれである。蝻のいる谷にはホタルが飛ぶといわれているとの話で、カワニナとホタルの関係も推測されているようである。

阿嘉島で最も普通のカタツムリは、パンダナマイマイとオキナワウスカワマイマイとである。人家や畑の周りの灌木の落ち葉の下にいる。パンダナはアダンのことで、この種は海岸近くの平地に棲み山地にはいない。これに対して数は少ないが、山地には広くシュリマイマイのやや小型の島嶼型が分布している。この外、小型のカドマルウロコケマイマイや蓋で殻口を塞ぐヒラセアツブタガイが山地の落ち葉の間に分布する。また、白っぽいナメクジが普通であるが、まだ精査はしていない。あとスナガイやオカチョウジガイも各1個体採集したが、前種は海岸のハマユウの葉裏に付着していた。

川は谷で小さな流れになっているが、川口近くになると砂の中に水がしみ込んで、平常は海と連ならない。この谷川にはカワニナが普通であるが、下流ではトウガタカワニナが棲む。この外、ヨーロッパからの侵入種サカマキガイが侵入している。

海岸に棲む陸産貝はカシノメガイが記録されるのみである。陸・淡水貝類は沖縄本島と全く同じであるが、島嶼隔離でシュリマイマイ、カドマルウロコケマイマイなどは多少形が変わっている。山間に相当広い湿地があるが、そこには淡水貝は1種も見い出せなかった。



阿嘉島の貝

上段左 チョウセンサザエ

中段左 キイロタカラガイ

下段左 ジャノメダカラガイ

中 アンボンクロザメガイ

中 ニシキアマオブネガイ

中 ホソムギヨフバイ

右 コオニコブシガイ

右 ノシガイ

右 ムロガイ